

# 英 語

## 目 次

I 研究の目的 .....	173
II 研究の対象と方法 .....	173
1. 分析の対象としてとりあげた調査問題 .....	173
2. 分析の方法 .....	173
(1) 分析的問題作成のねらい .....	173
(2) 手続き .....	173
III 結果とその考察 .....	174
1. 発音について .....	174
(1) Aural Perception Test について .....	174
a [æ]—[e] .....	175
b [u:]—[u] .....	175
c [s]—[θ] .....	175
d [i:]—[i] .....	175
e [i:]—[e:] .....	175
f [a:]—[ə:] .....	175
g [ʌ]—[ə:] .....	175
h [h]—[f] .....	176
i [r]—[l] .....	176
(2) Production Test について .....	176
① ペーパー・テストの結果 .....	178
② 録音テープ・テストの結果 .....	178
③ ペーパー・テストと録音テープ・テストの結果 .....	179
a [ou]—[ɔ:] .....	179
b [ə:]—[a:] .....	179
c [i:]—[i]—[e] .....	180
d [æ]—[ʌ] .....	180

e [s]—[f] .....	181
(3) Sentence Stress について .....	182
① 分析的問題(ペーパー・テスト) 1 .....	185
② 分析的問題(ペーパー・テスト) 2 .....	185
③ 分析的問題(ペーパー・テスト) 3 .....	185
(4) Intonation について .....	186
① 分析的問題(録音テープ・テスト) 1 .....	186
② 分析的問題(録音テープ・テスト) 2 .....	186
③ 分析的問題(録音テープ・テスト) 3 .....	186
3. 文法事項について .....	188
① than について .....	189
② not so ~ as について .....	189
③ to について .....	189
④ How much と How many について .....	190
4. 書く力について .....	191
(1) 書き換え問題 .....	191
① 進行形について .....	192
② 受身の形の文について .....	193
③ 感嘆文について .....	194
(2) 書くことについて .....	196
① 「あなたはいつここにきましたか。」 .....	197
② 「わたしは彼に本を一さつあげました。」 .....	198
③ 「わたしはトムがそこに立っているのを見ました。」 .....	198
④ 「彼はアメリカへ行ったことがある。」 .....	200
⑤ 「これらの鉛筆のうち一本は赤い。」 .....	200
⑥ 「彼は右手に本を一さつもっています。」 .....	201
⑦ 「彼は川で泳ぎます。」 .....	201
5. 読解力について .....	202
① 調査問題について .....	205
② 分析的問題(ペーパー・テスト) について .....	205
③ 分析的問題(録音テープ・テスト) について .....	206
④ 調査問題(放送問題) について .....	206
V ま と め .....	207

# I 研究の目的

昭和40年度全国学力調査中学校第3学年英語について、調査の結果を分析的に研究し、学習指導改善のための資料とする。

## II 研究の対象と方法

### 1 分析の対象としてとりあげた調査問題

大問	分野・領域	ねらい
③	聞くこと 話すこと 発音	文中の語の強勢についての習熟
⑤	読むこと 文の意味	パラグラフにおける要点の理解
⑥	書くこと 語の運用	基本的な語の運用についての習熟
⑦	書くこと 文の転換	文における時制、態および文の種類を転換して書くことについての習熟
⑧	書くこと 文型の運用	文型を用いて日本文の意味を英文で書き表わすことについての習熟

### 2 分析の方法

#### (1) 分析的問題作成のねらい

調査問題のねらいに対して、調査結果に示された誤りの種類、傾向について確かめると同時に、内容的にも広い範囲にわたって生徒のもつ誤りやすさ、誤りの傾向を具体的には握ることをねらいとして分析的問題を作成した。分析的問題は録音テープによる聴取の問題と問題用紙によるものの2種類を作成した。問題用紙によるものは文中の語の強勢、読む力、書く力に重点をおき、録音テープによるものでは発音の聴取が重点となっているが内容には単語、問答における抑揚、長文読解を含めた。(内容についてはIII結果とその考察を参照)

なお、聴取にはnative speakerによることが望ましいのであるが、ここでは諸種の制約から録音テープによったものであり、録音テープの作成には新潟大学教育学部講師Mrs. Deffnerのご協力をいただいた。

#### (2) 手続き

分析的問題の実施には、問題用紙によるテストを実施し、回収後録音テープによるテストを行なった。

#### (3) 対象

全国学力調査を実施した生徒の100名について実施した。

#### (4) 時期

昭和40年9月から10月に行なった。

## Ⅲ 結果とその考察

### 1 発音について

#### (1) Aural Perception Testについて

(分析的問題)

録音テープ・テスト

ex) boy	boy	boy
1. live	leave	live
2. net	knit	knit
3. men	man	men
4. wait	wet	wet
5. bird	bud	bird
6. heard	hard	heard
7. cat	cut	cut
8. hut	hot	hut
9. bought	bought	boat
10. hop	hope	hope
11. pull	pool	pull
12. think	sink	think
13. light	ight	right
14. heat	feet	feet
15. seen	seen	sheen

解答用紙

これは「ききわけ」の力をみる問題です。それぞれ三つずつ単語を読みますから、その中から一つだけ他の二つとは異なったものを選びだして、その番号を○で囲みなさい。

例	1	2	③	8	1	②	3
1	1	②	3	9	1	2	③
2	①	2	3	10	①	2	3
3	1	②	3	11	1	②	3
4	①	2	3	12	1	②	3
5	1	②	3	13	1	2	③
6	1	②	3	14	①	2	3
7	①	2	3	15	1	2	③

○印正答

ただしMrs. Deffnerのhot, hopの発音はそれぞれ[hæt], [hæp]であった。

表1 Aural Perception Testの正答者数

番号	1	2	3	4	5	6	7	8
正答者数	40	40	16	79	45	43	87	46
備考	[i:]-(i)	[e]-[i]	[æ]-[e]	[ei]-[e]	[ʌ]-[ə:]	[a:]-(ə:]	[æ]-[ʌ]	[a]-[ʌ]
9	10	11	12	13	14	15		
97	87	19	19	53	36	95		
[ou]-[ə:]	[a]-[ou]	[u:]-(u)	[s]-[θ]	[r]-[l]	[h]-[f]	[ʃ]-[s]		

表2 正答数分布

正答数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
人数	0	0	0	1	6	7	11	17	20	16	13	5	3	1	0	0

去年は〔a〕-〔ʌ〕が14,〔h〕-〔f〕が21,〔r〕-〔l〕が23,〔s〕-〔θ〕が40,〔f〕-〔s〕が53〔æ〕-〔e〕が64で他は70以上であった。ところが今年は、表でわかる通り,〔æ〕-〔e〕が一番悪く、次いで〔u:〕-〔u〕,〔s〕-〔θ〕,〔h〕-〔f〕,〔i:〕-〔i〕,〔e〕-〔i〕,〔a:〕-〔ə:〕,〔ʌ〕-〔ə:〕,〔a〕-〔ʌ〕,〔r〕-〔l〕が順次悪かった。Mrs. Defnerの発音がはっきりしていただけに悪すぎる。

**a〔æ〕-〔e〕** 〔æ〕は単独でとり出すと、日本語のアのようにきこえるといっても,〔æ〕の前母音としての性格が〔m〕のように口の前で出す音の時には〔e〕に近いという印象をあたえて、正答者が極端に少なかったものと思われる。haveとhatをそれぞれ生徒に発音をカナ書きさせると〔ヘブ〕〔ハット〕となる。これは〔æ〕の二面性を示すものであろう。こういう点を心得て指導がなされる必要がある。

**b〔u:〕-〔u〕** 〔u〕の発音があまりにも緊張しすぎると〔u:〕に近くなる。特にfullやpullはfoolやpoolに非常に似た発音になることがある。あるいはその傾向がMrs. Defnerの発音にみられたのであろうか。それにしても、去年の正答者86に比べるとあまりにも少ない。これは恐らく〔u〕と〔u:〕の質の差を無視して、長さの相異にだけたよって,〔u〕と〔u:〕を区別してきたためではあるまいか。Mrs. Defnerの〔u:〕の発音は長さの点だけでは確かに〔uu〕と〔u〕の中間位であった。長さの相異にだけたよって,〔u〕と〔u:〕を区別できるときはいいが、異なった環境にあらわれて長さの違いが頼りにならないときは,〔u:〕と〔u〕の区別は聴取上の問題点となる。それがあらわれたものであろう。音質の差を習得させることが大切である。

**c〔s〕-〔θ〕** この二つは肉声なら正答はもっと多かったものと思われる。しかし〔θ〕は日本語にはない音だけに、あるいは同じに聞きとれたのかもしれない。また生徒の中には〔s〕と〔θ〕を全然区別しないで、日本語の「ス」ですましていたものがあるのは事実である。ペーパー・テストでsinkの〔s〕と同じ〔s〕の発音をもつ語を選ばせたらthinkを選んだものが20%もあらわれたことでもわかる。〔θ〕が日本語にはないので,〔θ〕と〔s〕の区別は聴取の問題点となるものであるが,〔s〕は摩擦音で、スーと空気の出ている音がきこえるのに〔θ〕の方は同じ摩擦音でも、空気の出ている音がきこえないなどのことを指摘すると、生徒はよくわかってくれるものである。〔θ〕の発音と共に,〔s〕と〔θ〕の聴取の区別をしっかりとつかませることが大切である。

**d〔i:〕-〔i〕** この二つは長さも関係はするが根本的には質的に違うものである。日本語の「イ」と「イー」は長さの違い、すなわち「イー」は「イ」の二倍の長さということであって質的に違うものではない。このくい違いから,〔i:〕と〔i〕の区別がむずかしいことは容易に想像がつく。しかし訓練によって、この区別はそうむずかしいものではない。

**e〔i〕-〔e〕** 日本語には「イ」と「エ」があるから、区別できそうに見えるが、結果はあまりよくない。それは英語の〔i〕が弛援母音のためで、その柔かい発音がなされるとき舌が日本語の「イ」よりも低く、「エ」に近いためであろう。しかし〔i〕と〔e〕はそう区別のむずかしいものではない。

**f〔a:〕-〔ə:〕** 日本語にうつすと、どちらも「アー」となる。よほど注意しないと区別はむずかしい。新潟清心女子高校のSister Paulaが生徒の発音の矯正に一番苦労するのがこの二つの音の区別であると云われたことがある。しかしよく注意しさえすれば、口を大きく開く〔a:〕は、口の開きの比較的小さい〔ə:〕に比べ、そう区別のむずかしいものではない。去年のテストでは91であった。

**g〔ʌ〕-〔ə:〕** 二つとも中部半開母音で、それぞれの隣接音は同じであるから、その影響は同じ

と考えると、あとは長さの相異となる。口の開きが大きくなればなるほど後に続く音によって影響をうける長さの差異が目立たなくなるわけで、よく訓練をうけていないと区別しにくいことになる。

**h [a]—[ʌ]** この二つは両方とも中部母音で、[a]は開母音、[ʌ]は半開母音という質の相異だけでよく似ているものである。[a]でなくて[ɔ]であったら、もっとよい結果が出たことであろう。昨年は14と非常に悪かったが、それに比べればかなりよかったといえよう。最近では米音の[a]も、レコード、録音テープなどで聞く機会が多いから比較的よかったものと思われる。

**i [h]—[f]** [h]と[f]が日本人にとって問題となるのは[hu]と[fu]である。[hi:]と[fi:]はそれほどではない。昨年の21に比べれば、36はよいと云えるが、[r]—[l]、[s]—[θ]に比べたら、もっとよい結果が得られてもよかったように思う。

**j [r]—[l]** 日本語のラ行の子音は舌端が歯茎につくが、ついたまま息が両側から流れるのではなく、つくとすぐはなれて声は舌の中線に沿って流れる。したがって[r]でもなく、[l]でもない[r̥]なのであるが、日本語の場合は、英語の[r]と[l]のように区別しなければならない類似音が、[r]にはない。だから日本人にとっては、[r]と[l]の区別は非常に難しいことは、容易に相像がつく。

以上、正答者数が50以下のものについて、どこが原因になりそうかを検討してみたが、いずれもcontrastの原理を利用したminimal pairsを使つての指導法で、くり返し、くり返し、録音テープ、レコード、あるいは直接教師の口からなどで十分訓練すれば、結果はかなりよくなる筈である。そして耳できくことがよくなってくれば、それにともなって、発音もよくなっていくわけである。教師も英語と日本語のそれぞれの音韻と、それらの音韻の組合わせの状態をよく検討して、そこから指導方法を見つけていくことが大切である。広島ノートルダム清心女子高校のSister Veronicaが、中学生の時にしっかりと正しい発音を教え込むと、彼らの発音はほとんど完全に近くなるといっておられたことが思い出される。

## (2) Production Test について

### (分析的問題)

次のア、イ、ウ、エ、オの単語のうちには、左端の単語の下線部の発音と同じ発音を含むものが一つずつあります。解答らんはその記号を書きいれなさい。

1. <u>boat</u> (ア <u>ball</u> イ <u>go</u> ウ <u>brought</u> エ <u>walk</u> オ <u>down</u> )	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">解答らん</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1.</td> <td>イ</td> </tr> <tr> <td>2.</td> <td>ア</td> </tr> <tr> <td>3.</td> <td>イ</td> </tr> <tr> <td>4.</td> <td>ウ</td> </tr> <tr> <td>5.</td> <td>オ</td> </tr> <tr> <td>6.</td> <td>ウ</td> </tr> </tbody> </table>	解答らん		1.	イ	2.	ア	3.	イ	4.	ウ	5.	オ	6.	ウ
解答らん															
1.		イ													
2.		ア													
3.		イ													
4.		ウ													
5.	オ														
6.	ウ														
2. <u>bird</u> (ア <u>early</u> イ <u>hard</u> ウ <u>father</u> エ <u>have</u> オ <u>cut</u> )															
3. <u>see</u> (ア <u>say</u> イ <u>speak</u> ウ <u>set</u> エ <u>bed</u> オ <u>live</u> )															
4. <u>sit</u> (ア <u>people</u> イ <u>head</u> ウ <u>sing</u> エ <u>rice</u> オ <u>set</u> )															
5. <u>have</u> (ア <u>men</u> イ <u>mother</u> ウ <u>cut</u> エ <u>heard</u> オ <u>eat</u> )															
6. <u>six</u> (ア <u>sheep</u> イ <u>ship</u> ウ <u>send</u> エ <u>shine</u> オ <u>think</u> )															

解答らんの中の文字は正答を示す。

(分析的問題)

録音テープ・テスト

- ex) eat [it] [i:t] [eit]
1. boat [bə:t] [bout] [baut]
  2. see [si:] [sei] [sai]
  3. ball [bə:l] [boul] [bɔ:l]
  4. sit [si:t] [set] [sit]
  5. hard [hɑ:d] [hə:d] [had]
  6. look [lu:k] [luk] [lAk]
  7. but [bʌt] [bæt] [bɛ:t]
  8. bird [bɑ:d] [bɛ:d] [bʌd]
  9. down [daʌn] [da:n] [daun]
  10. back [bʌk] [bæk] [bɔ:k]
  11. not [nɑ:t] [nat] [nout]
  12. six [fiks] [siks] [f:ks]
  13. think [siŋk] [θiŋk] [f:ŋk]
  14. light [lait] [rait] [rait]
  15. feet [hi:t] [hi:t] [fi:t]

次に書いてある単語を三通りに発音しますから、何番目の発音が正しいかをききわけて、その番号を○で囲みなさい。

例 eat	1 ② 3	8 bird	1 ② 3
1 boad	1 ② 3	9 down	1 2 ③
2 see	① 2 3	10 back	1 ② 3
3 ball	1 2 ③	11 not	1 ② 3
4 sit	1 2 ③	12 six	1 ② 3
5 hard	① 2 3	13 think	1 ② 3
6 look	1 ② 3	14 light	① 2 3
7 but	① 2 3	15 feet	1 2 ③

○印は正答

ただし Mrs. Deffner の発音は not は [nat] であつたし、had は [həd], dawn は [da:n], naught は [na:t] であつた。発音記号はそれぞれ Mrs. Deffner の発音に従つた。

発音の production test は、実際は二、三の native speaker に生徒一人一人の発音をきいてもらつて、いいか、悪いか、passable かどうかをきめてもらえば一番よいわけであるが、録音テープに正しい音と、生徒のまちがいそうな発音を吹きこんできかせ、正しいものを選ばせる方法をとつた。ペーパー・テストと録音テープ・テストの両方を実施したのは、ペーパー・テスト、すなわち頭で考えていることと、実際口に出す場合とが果たして一致するかどうかを確かめるためであつた。というのは生徒の中にはペーパー・テストでは出来るが、実際に発音させるとさっぱりできないとか、またその逆に発音させると出来るが、ペーパー・テストでは出来ないといった具合に、頭の中で考えているのと、実際とがちがっている生徒がいるからである。某中学の学業成績の良い生徒に (ア) card, (イ) father, (ウ) heart, (エ) heard の中から、下線部の発音が他の三つの発音と異なるものを選ばせたら (ア) と正解してくれたが、発音してもらつたら、[hə:d] ではなくて、[hiəd] と発音した。逆に某中学の生徒に (ア) sing, (イ) rice, (ウ) ship, (エ) six の中から、下線部の発音が他の三つの発音と異なるものを選ばせたら、「ありません」と答えた。実際に発音してもらつたら、rice を [rais] と正しく発音していたが、[rais] 中の [i] は他の語の [i] と同じと考えて、「ありません」と答えていたことが判明した。ペーパー・テストの場合は先ず読めるか、読めないかの問題があつて、次に発音を比較するということになる。そこには、上で述べたような偶然的な正答、あるいは答え方の操作がわから

なくての誤答というものが、何割か入ってくることはまぬがれないことである。そういう危険性を少しでもさけたいと思って録音テープ・テストもつけ加えたわけである。

テストの結果はそれぞれ次の通りである。

① ペーパー・テストの結果

表3 正答者数

番 号	1	2	3	4	5	6
正答者数	21	25	53	53	21	15

表4 正答数分布

正 答 数	0	1	2	3	4	5	6
人 数	15	28	25	22	8	2	0

なお誤答分布状態を次に記してみると、(人数)

誤答共通点

(1) ball	36	brought	27	walk	8	down	6	〔ou〕
(2) hard	57	father	11	have	3	cut	4	〔ə:〕
(3) say	15	set	12	bed	10	live	11	〔i:〕
(4) people	2	head	7	rice	16	set	22	〔i〕
(5) men	8	mother	31	cut	14	heard	25	〔æ〕
(6) sheep	9	ship	22	shine	9	think	44	〔s〕

〔ɔ:〕と〔ou〕の区別,〔ə:〕と〔ɑ:〕,〔æ〕と〔ʌ〕または〔ə:〕,〔si〕と〔ʃi〕の区別は予想したとおりよくなかった。ただ最後のものにthinkを選んだものが44名もいたことは全く驚いた。目で見ても、つづりが全然ちがうから、すぐわかると思っていたが、これでは発音の場合に〔s〕と〔θ〕を全然区別していないことが明らかであり、さらに聞きとるときに、この二つは区別ができなくて当然と思われる。もっとつづり字と発音の関連にも気をつけて、指導がなされなければならない。

② 録音テープ：テストの結果

表5 正答者数

番 号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
正答者数	68	90	50	27	13	31	40	26	75	64	22	41	46	36	69

表6 正答数分布

正 答 数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
人 数	0	0	0	4	9	17	13	11	22	9	7	5	1	0	0	0

なお、誤答分布状態を次の記してみると、次のようになる。(人数)

1. (boat)	〔bə:t〕	17	〔baut〕	15
2. (see)	〔sei〕	9	〔sai〕	1
3. (ball)	〔bə:l〕	21	〔boul〕	27
4. (sit)	〔si:t〕	48	〔set〕	24
5. (hard)	〔hə:d〕	23	〔həd〕	64
6. (look)	〔lu:k〕	59	〔lak〕	10
7. (but)	〔bæt〕	52	〔bə:t〕	8
8. (bird)	〔ba:d〕	30	〔bʌd〕	44

9. (down)	[dʌn]	18	[da:n]	7
10. (back)	[bʌk]	30	[ba:k]	6
11. (not)	[na:t]	57	[nout]	21
12. (six)	[ʃiks]	26	[fi:ks]	32
13. (think)	[siŋk]	48	[fiŋk]	5
14. (light)	[rait]	20	[ɾait]	42
15. (feet)	[hi:t]	20	[hi:t]	11

こうしてみると生徒が、一つ一つの単語をいかにいいかげんに読んでいるかがはっきりしてくる。90の正答者数だった see は別として、down (75), feet (69), boat (68), back (64), hard (50) の6つの単語が正答者数50以上で、あとの9つの単語 (ball, sit, look, but, bird, not, six, think, light) はいずれも50以下であった。特に、ball を [bə:l] と読んだり but を [bæt], bird を [bʌd], down を [dʌn], back を [bʌk] と読んだりしたものが多い。[s] と [θ], [r] と [l], [si] と [fi] のむずかしさはすでにふれた。また [sit] と [si:t], [ha:d] と [had], [luk] と [lu:k], [nat] と [na:t], [siks] と [fi:ks] など、同じく皆長音化して発音しているための混乱と誤りが表われている。ただし [ha:d] と [had] は逆ではあるが。それから母音の [æ] [ʌ] [ə] [ɔ:] [ɑ:] [ɑ], [ɔ:] と [ou], などが正しく発音されていないことがはっきり出ている。一つ一つの語に関連して、正しい発音を徹底させる必要がある。

### ③ ペーパー・テストと録音テープ・テストの結果の比較

#### a [ou] と [ɔ:]

ペーパー・テストで boat [bout] を正しく読んで go [gou] を選んだものは21であった。録音テープで boat の発音を [bout] と正答したもの68, また ball の発音を [bɔ:l] と正答したもの50。なお録音テープで [ou] と [ɔ:] の区別のできたものが97であった。これからみると、実際はかなりのものが口での発音と、頭の中で考えている発音とがちがっているのではないかと思われる。

ペーパー・テストで正解を与えた21の録音テープ・テストの結果は boat についてみると [bout] 17, [bɔ:t] 3, [baut] 1 となった。ball については [bɔ:l] 14, [boul] 4, [baul] 2, 無答1であった。逆に録音テープ・テストで正答したもののペーパー・テストにおける応答は、boat については正解者68の内、正答を与えた17を除くと、他は ball を選んだもの21, brought 18, walk 7, down 1, 無答2であった。ball については正解者50のうちペーパー・テストで正答を与えた14を別にすると、他は ball を選んだもの11, brought 14, walk 4, down 5, 無答2であった。

またペーパー・テストで正答出来たもので、録音テープ・テストで [bout], [bɔ:l] の両方に正答のもの10という結果であった。これは [ɔ:] と [ou] の区別が定着していない。不安定なものがいかに多いかを示すものである。

#### b [e:] と [a:]

ペーパー・テストで、bird [bɛ:d] を正しく読んで、early [ɔ:li] を選んだもの25, 誤答の hard を選んだもの57であった。録音テープ・テストで hard の発音を正しく [ha:d] としたもの13, [hab] としたもの64であった。bird を [bɛ:d] と正答したもの26, [bʌd] と誤答したも

の30であった。録音テープ・テストでは[hə:d]と[ha:d]の区別をしたもの43,[bə:d]と[bAd]は45であった。この結果からも[ə:]と[a][ʌ]の区別がかなりむずかしいことがはっきりして来る。

ペーパー・テストの正答者25は、録音テープ・テストではbirdに正答しているもの9,誤答[bə:d],[bAd]それぞれ8であった。また録音テープ・テストのhardについては、正答したものの4,誤答[hə:d][hAd],それぞれ4と17であった。

逆に録音テープ・テストの正答者をペーパー・テストからみると、hardに正答しているもの13のうち、ペーパー・テストで正答のもの4,誤答のhard8,father1,であった。またbirdの正答23のうち、ペーパー・テストで正答のもの10,誤答のhard11,father3,have1,cut1となっている。ペーパー・テストおよび録音テープ・テストの両方で、三つとも正答のもの1という結果であった。Mrs. Deffnerがアメリカ人であっただけにhard,birdとも[r]の音が多少みとめられたりして、むずかしさは予想できたが、結果成績は予想よりはるかに悪かった。ペーパー・テスト、録音テープ・テストともできたもの1とは改めて、Sister Paulaの「[a:]と[ə:]の区別が生徒にはとてもむずかしい」との言が思い出されるのである。

#### c [i:]と[i]と[e]

ペーパー・テストでsee[si:]を正しく読んで、speak[spi:k]と正答したものの53。またsit[sit]を正しく読んで、sing[sɪŋ]と正答したものの53。[sit]に対し、誤答の[set]を選んだものが22もいたことは[i]と[e]の区別のむずかしさを示すが、これは[i]を日本語の「イ」でおきかえ、しかも「イ」と[e]がかなり似ていることに基くものと思われる。ところで録音テープ・テストの結果をみると、seeにおいては、正答したものの90の高率をあげているが、一方sitの方は正答したものの27,誤答[si:t],[set]を選んだものがそれぞれ48と24であった。seeの方は別として、sitに関しては[i]と[i:]の区別がかなりむずかしいことがわかる。また[i]と[e]の混乱もかなりみられる。ペーパー・テストでspeakと正答したものの53を録音テープ・テストについてみると、seeの正答を選んでいるもの50,[sei],[sai]の誤答を与えているもの、それぞれ2と1となった。ペーパー・テストのsitに対し、singと正解した53を録音テープ・テストからみると、[sit]と正答したものの15,誤答[si:t],[set]を選んだもの、それぞれ30と8であった。また録音テープ・テストのseeに正答した90をペーパー・テストからみてみると、speakと正答した50は別として、誤答sayが12,setが10,bedが9,liveが8,無答1であった。録音テープ・テストのsitについて正答した27をペーパー・テストの面からみると、singと正答した16は別として、誤答のsetを選んだもの6,riceが4,headが1であった。ペーパー・テープとも4つできたものは僅か9であった。

[i:],[i],[e]の音質のちがいに注意しないところにその原因があると思われる。Aural Perception Testでは[i:]と[i]は正答40,[e]と[i]は40,[ei]と[e]は79であった。

#### d [æ]と[ʌ]

ペーパー・テストではhave[hæv]を正しく読んで、cat[kæt]を選ぶもので、正答者数は21で、誤答のmenを選んだもの8,mother31,cut14,heard25であった。haveはとかく[æ]と[v]の組み合わせで、[æ]が[e]に近きこえるためか、生徒は日本語のカナでよく「ヘブ」

としているものが多いので、menを選ぶものが多いのではないかと思ったが、むしろ [həv] に生徒がよくなっていたためか、mother を選んだものが多かった。have と cat では同じ [æ] でもかなり違って聞こえるために、正答者数が少なかったのであろう。ところでテープで back の発音を正しく [bæk] と解答したものは 64, [bAk] が 30, [ba:k] は 6 であった。[bAk] の 30 は日本語になった「バック」の影響も多分にあったものと思われる。また、but では、[bAt] と正答をしたもの 40, [bæt] と誤答したもの 52, [bə:t] は 8 であった。やはり [æ] と [ʌ] の区別のむずかしさははっきりでているように思われる。それにしても、Aural perception Test の cat と cut の区別を正しくしたものが 87 となっている所から判断すると、have なり but の発音が生徒にしっかり定着していないのではないかとも思われる。なお、ペーパー・テストの have の正答者 21 を録音テープ・テストからみると、back に正答しているもの 15, but の方は、正答しているものが 8 であった。録音テープ・テストに正答したものをペーパー・テストからみてみると、back の正答者 64 については、ペーパー・テストでは cat と正答したもの 15 は別として、誤答分布は men 6, mother 18, cut 7, heard 17, 無答 1 となっている。but の正答者 40 についてみれば、ペーパー・テストでは正答者 8 は別として、men 4, mother 14, cut 4, heard 10 であった。そしてペーパー・テープの三つ全部できたものは僅か 6 で、生徒が [æ] と [ʌ] と [ə:] などをつかいかい加減に発音しているかがはっきりしてくる。また、頭で考えている音と、実際耳なり、口での音とは一致していないことがはっきりするのである。

#### e [s] と [ʃ]

ペーパー・テストでは six [siks] を正しく読んで send [send] を選ぶもので、正答したもの 15、think と誤答したもの 44。ship などの [ʃ] の音を選んだもの 40 となった。日本語には [si] という音がないために、とかく [ʃi] でおきかえられるということはよくあることで、six の場合と、ship の場合は、[si] と [ʃi] の発音環境が似ているので、[ʃip] を選んだもの 22 は予想できたが think の 44 は全く不測のことであった。前述したように、[s] と [θ] を区別していないことを如実に示したものと云える。録音テープ・テストでは、six の正答者は 41, [ʃiks] と誤答したもの 26 [ʃi:ks] としたもの 33 であった。また think [θiŋk] の方は、正答者 46, [siŋk] と誤答したもの 48, [ʃiŋk] は 5 であった。Aural Perception Test の同じ sink と think の区別ができたものが 19 であったのを思いあわせると、かなり、その場、その場の答えがあったのではないかと想像できるのである。それにしても同時にやったテストで think の発音を選ばせたのに、[θiŋk] と正答したものが 46 で、Aural Perception Test の区別ができたものが 19 とは問題の出し方がちがっただけで、同じ問題なだけに、不思議な感じがする。

なお、ペーパー・テストの six に対し、send に正答したもの 15 を録音テープ・テストからみると、[siks] の正答者 9, [ʃiks] と誤答しているもの 6, また逆にテープ・テストで [siks] と正答したもの 40 のペーパー・テストの解答分布状態をみると、send の正答 9 は別として、誤答では sheep 1, ship 5, shine 4, think 22 となった。また think をみると、[θiŋk] と正答したもの 45 のペーパー・テストの結果は正答者の 9 を除いて、seep 4, ship 13, shine 2, think 18 となっている。ペーパー・テープとも三つできたものは僅かに 4 であった。[s] と [θ], [ʃi] と [si] のむずかしさとともに、訓練の必要さが痛感される。

発音の指導にあたっては、各音の発音の仕方を一つ一つ単独に教えることも必要ではあるが、その各音と隣接音との組み合わせ、あるいはその発音のなされる発音環境、いかえると、音韻の分布状態を教師が心得ておいて、その知識をもとにして、生徒の弱点をとらえ、実際の発音を生徒に体得させることの方がより大切である。自分のことに至って恐縮であるが、筆者の娘が、現在1才10か月で、丁度言葉覚えはじめたところで、よく注意していると、発音しやすい音韻の組み合わせと、しにくい組み合わせのあることに気づく。娘の名前はトモコというが、娘はいつも自分のことをモコと呼んでいる。ト、モ、コはそれぞれ発音できるのであるが、トモコと続けることができないで、モコとなる。またトモと続けることもできないのである。娘の場合トとモの結合に難点がある。これと同じことが、生徒に発音指導をする際におきていることは容易に想像されるのであって、そういう trouble spots を、英語と日本語の音韻体系の比較から、見出して、その発音の徹底をはかることが大切である。例えば語頭の [P] は氣息を伴い、語中の場合はそれが弱くなり、語尾では破裂がなくなるというようなことは、生徒は埋くつでしらくとも、体得していることが必要となろう。また、発音環境によって、きこえ方がちがうということでは、筆者が40人の生徒に have [h æ v], has [h æ s], had [h æ d] の [æ] がどのようにとられているか発音をカナで書かせた。その結果 have を「ヘブ」としたもの18人、「ハブ」22人。has では「ヘズ」1人、「ハズ」39人、had では「ヘッド」3人、「ハッド」37人で、同じ [æ] でも、発音環境によって、[e], あるいは [ʌ] に近く、かなり発音が違って受けとられていた。だから、個々の音を単独にとらえて教えることも大切であるが、それ以上に、発音環境よっての発音のずれになれさせ、体得させていくことが大切である。それには単語だけでなく、文を通しての練習が必要となろう。これには minimal pairs を利用することが一番よいと思われる。最近筆者の生徒の1人が、レスリングで、3週間程渡米してきたが、その生徒が帰ってきてから話したことばの中に、「始め上陸して、英語をきいたときは、ただ一連の音の連続としかきこえず、単語一つつかめなかった。しかし三週間の終わり頃になってきたら、意味はわからなかったが、単語と単語のきれ目ははっきりわかるようになった。」というのがあった。hearing の重要さを示すことばとして大変興味深く感じたのである。あわせて思い出されるのは、新潟大学の付属中学校に数年前、フルブライト交換教諭としておられた Mr. Matsueda の「日本では一つ一つの発音とか、intonation がかなり重要視されてきていることは喜ばしいことであるが、hearing がもっと強調されてよいのではないか。」と云われたことである。レコードや録音テープ、あるいは native speaker による生の声などを通して、時間をかけてくり返し、くり返し生徒に native speaker の声をきかせて、慣れさせ、体得させることが必要である。

### (3) Sentence Stress について

(調査問題)

次の1, 2, 3のア, イ, ウ, エ, オをつけた文について、最も強く発音する単語を、ア, イ, ウ, エ, オの中から一つずつ選んで、解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

1. What did you find in the box ?

I found a bird in it.

ア イ ウ エ オ

2. May I read this book ?

No, you mustn' t. You may read that one.  
ア イ ウ エ オ

3. I didn' t go there with my father.

I went there with my mother.  
ア イ ウ エ オ

解 答 ら ん					
1.	ア	イ	Ⓐ	エ	オ
2.	ア	イ	ウ	Ⓑ	オ
3.	ア	イ	ウ	エ	Ⓒ

○印は正答

( 分析的問題 )

次の下線をひいた文の中で、特に強く発音される語はどれでしょうか。解答らんにその記号を書き入れなさい。

1. "Where did you go last Sunday ?"

"I went to the town."  
ア イ ウ エ オ

2. "May I take this bag ?"

"No, you mustn' t. You may take that one."  
ア イ ウ エ オ

3. "I didn' t go there with my sister.

"I went there with my brother."  
ア イ ウ エ オ

解 答 ら ん	
1.	オ
2.	エ
3.	オ

( 解答らんの中の文字は正答 )

( 分析的問題 )

録音テープ・テスト

ex)

1. I like an apple better.
2. I like an apple better.
3. I like an apple better.
4. I like an apple better.
5. I like an apple better.

次の下線をひいた文について、一か所だけ強く発音する読み方で五通りに二回読みます。どの単語を強く発音した読み方が正しいかをききわけて、その番号を○でかこみなさい。

1

1. I found a bird in it.
2. I found a bird in it.
3. I found a bird in it.
4. I found a bird in it.
5. I found a bird in it.

2

1. You may read that one.
2. You may read that one.
3. You may read that one.
4. You may read that one.
5. You may read that one.

3

1. I went there with my mother.
2. I went there with my mother.
3. I went there with my mother.
4. I went there with my mother.
5. I went there with my mother.

(ただし下線の語を強く読む)

例 “Which do you like better, an apple or a pear?”

“I like an apple better.”

1 “What did you find in the box?”

“I found a bird in it.”

2 “May I read this book?”

“No, you mustn't.  
You may read that one.”

3 “I didn't go there with my father.”

I went there with my mother.

(ただし問題は調査問題に同じ)

(例)	1	2	3	④	5
1	1	2	③	4	5
2	1	2	3	④	5
3	1	2	3	4	⑤

○は正答

表7 調査問題応答分布

	ア	イ	ウ	エ	オ
1	3	28	⑤⑤	4	10
2	10	9	18	④⑥	17
3	4	32	7	20	③⑦

表8 分析的問題(ペーパー・テスト)応答分布

	ア	イ	ウ	エ	オ
1	2	23	6	3	⑥⑥
2	8	16	21	⑤⑤	20
3	2	15	7	13	⑥③

表9 分析的問題(録音テープ・テストによる)応答分布

	ア	イ	ウ	エ	オ
1	1	18	⑤⑦	13	9
2	6	19	16	④⑩	18
3	10	14	7	2	⑥⑥

表10 正答者数分布

正答数	0	1	2	3
調査問題	22人	36	25	17
分析的問題(ペーパー)	17	26	35	22
分析的問題(テープ)	14	29	38	19

表 1.1 分析的問題のペーパー・テスト結果とテープ・テスト結果の相関

テープテスト正答数 ペーパーテスト正答数	0	1	2	3
0	3人	5	9	0
1	7	10	6	2
2	4	10	14	8
3	2	2	9	9

調査問題と分析的問題の実施時期がずれていたもので、どの位の差がみられるかと思って、分析的問題の録音テープ・テストでは調査問題と同一問題を実施してみたが、3の問題はかなりの向上を見せたが1、2は大してかわりはなかった。個人別にみると、調査問題では3つできていて、録音テープ・テストで0というものが3、逆のものも3であった。

① 分析的問題 (ペーパー・テスト) whereときいているのだから、当然、townに、sentence stressがくる。正答者数は66。ところがwentと誤答したものが23もあったが、whereで始まる問の文に、関係なくただ機械的に動詞だから、あるいは上の文と比較すると、上の文にない、新しい単語だからと云う理由から、wentとしたものであろう。

録音テープ・テストではwhatで始まる疑問文に対する答であるから、birdにsentence stressがある。正答は57。foundとしたものが18。両方の関係をみると、ペーパー・テストで正答のもののうち、録音テープ・テストで正答のもの42、foundとしたもの9、itとしたもの8であった。また録音テープ・テストで正答のもの57のうち、ペーパー・テストで正答のもの42は別として、wentを強く読んだイとしたもの12であった。

また、調査問題と録音テープ・テストの結果をみると、調査問題で正答し同じ問題を録音テープ・テストで誤答のもの21。逆に録音テープ・テストで正答、調査問題で誤答のもの23であった。3つとも正答のものは28であった。

② 分析的問題 (ペーパー・テスト) this bagに対して、that oneと対照を示す場合である。したがってthatにsentence stressがある。正答35、takeとしたもの21、oneとしたもの20。録音テープ・テストをみると、正答40。mayを強く読んだ場合としたもの16。oneをつよく読むとしたもの18。takeを強く読むとしたもの16であった。両者の関係をみるとペーパー・テストと録音テープ・テストの両方正答18であった。ペーパー・テストで正答、録音テープ・テストに誤答したもののうちで一番多かったものはtake7であった。また録音テープ・テストで正答、ペーパー・テストで誤答のものうちで、一番多いのはoneをつよく読んだ5番10であった。

録音テープ・テストと調査問題の結果をみると、両方正答20。調査問題で正答、録音テープ・テストで誤答26。逆に調査問題で誤答、録音テープ・テストで正答20。後で行なわれた同一問題の録音テープ・テストの結果が悪い。

③ 分析的問題 (ペーパー・テスト) sisterでなくて、brotherであると、これも、2番と同じく対照の問題である。正答は63で、2番より結果はかなりよい。2番は、一般にsentence stressのない代名詞が対照を示すために、sentence stressをうけたものであるのに対し、3番は、一般にsentence stressのうけがちな名詞の場合だったから、わかりやすかったもので

あろう。多かった誤答はwentの15とwithの13であった。録音テープ・テストではmotherをつよく読む5としたもの66で、ペーパー・テストよりもよい結果であった。多かった誤答は動詞wentをつよく読んだもの(14)とIを強く読んだもの(10)であった。

両方正答51で、ペーパー・テストは正答、録音テープ・テストで動詞をつよく読んだ誤答2を選んだもの8、Iを強く読んだ1を選んだもの4であった。逆に録音テープ・テストが正答のものペーパー・テストについての誤答はwent5, with4, my6となった。

調査問題と録音テープ・テストでは両方正答29であった。これだけは、調査問題の正答37で、同じ問題の録音テープ・テストでは66と、約30の増加となっている。調査問題で正答、録音テープ・テストで誤答の8に対し、調査問題で誤答、録音テープ・テストで正答は37と増加した。

(分析的問題)

録音テープ・テスト

ex)

"Is he a teacher?" "Yes, he is a teacher."

"Is he a teacher?" "Yes, he is a teacher."

"Is he a teacher?" "Yes he is a teacher."

"Is he a teacher?" "Yes he is a teacher."

1 "How are you?" "Fine, thank you, How are you?"

"How are you?" "Fine, thank you, How are you?"

"How are you?" "Fine, thank you, How are you?"

"How are you?" "Fine, thank you, How are you?"

2 "What is your name?" "My name is Taro, What is your name?"

"What is your name?" "My name is Taro, What is your name?"

"What is your name?" "My name is Taro, What is your name?"

"What is your name?" "My name is Taro, What is your name?"

3 "What did you do yesterday?" "I went swimming in the pool."

"What did you do yesterday?" "I went swimming in the pool."

"Did you have a good time?" "Yes, I did."

"What did you do yesterday?" "I went swimming in the pool."

"What did you do yesterday?" "I went swimming in the pool."

"Did you have a good time?" "Yes, I did."

"What did you do yesterday?" "I went swimming in the pool."

"What did you do yesterday?" "I went swimming in the pool."

"Did you have a good time?" "Yes, I did."

次の会話を、下線部のあがり、さがりについて四通りに二回読みます。何番目の読み方が正しいか、よく注意してききわけ、その番号を○で囲みなさい。

例 "Is he a teacher?"

"Yes, he is a teacher."

1 "How are you?"

"Fine, thank you. How are you?"

2 "What is your name?"

"My name is Taro. What is your name."

3 "What did you do yesterday?"

"What did you do yesterday?" "I went swimming in the pool."  
 "What did you do yesterday?" "I went swimming in the pool."  
 "Did you have a good time?"

"I went swimming in the pool."

"What did you do yesterday?"

"I went swimming in the pool."

"Did you have a good time?"

"Yes, I did."

	解答らん			
例	1	2	3	④
1	1	②	3	4
2	①	2	3	4
3	1	2	3	④

○印は正答

表 1 2 応答分布

問題番号	1	2	3	4
1	30	③5	18	16
2	②2	35	25	18
3	17	30	26	②6

○印は正答

表 1 3 正答者数分布

正答数	0	1	2	3
人数	44人	35	17	4

intonationの問題は今まで、ペーパー・テストでは文尾をあげるとか、さげるとかをきく問題であった。こういうテープによる問題には恐く慣れてはいなかったと思われる。1・2番は教室でも比較的注意されているが、3番については、テープをきいてみると非常にむずかしく、26の正答は偶然によることと考えられる。

① "How are you?" で始まって、"How are you" と応答するのが、ふつうの intonation の型である。すなわち、始めの「御気嫌いかが」に対して、「君の方はどうなの」と you の部分が高められてなされる intonation pattern で、正答者は35あった。始めの挨拶として行なわれているとすれば、もっとよい結果であってよかった筈である。

② 始めの文は、ふつうの intonation pattern により、name のところが、高まり次の文では1と同じく、対照的に your が高められる。すなわち "What is your name?" に対し、"What is your name?" の組み合わせが正答である。正答者は22であった。

③ 繰返しを要求するいい方で、少しむずかしすぎはしないかと思われた。始めの文は What で始まる特殊疑問文であるから、文尾を下げて、"What did you do yesterday?" である。それに答えて、「プールに泳ぎにいった」といったのであるが、よくききとれなくて、「何をしたって?」ともう一度繰返してくれるように要求しているのが2番目の場合であって、この場合にはふつう、少しゆっくりとしかもはっきりと、文尾をあげる。すなわち "What did you do yesterday?" となる。

したがって4が正答で、正答者は26であった。

授業中はできるだけ、テープ、レコードなどでnative speakerの発音になれさせて、正しいintonationを身につけさせるように指導すべきである。そのためにはテキストのcontextをよく考えて、それに応じたintonationをたえず指摘して、生徒にintonationへ注意をむけさせることが必要である。

生徒の読み方の指導にあたっては、例えば長い文を生徒がうまく読めないときは、例えばIt's very kind of you to invite me to dinner. という文なら、intonationをくずさぬために、後の方から、まずto dinner,次いでto invite me to dinnerといわせそれができたら、of you to invite me to dinnerとし、さらにvery kind of you to invite me to dinnerとして、It's very kind of to invite me to dinner. という文へと練習させる。こうするとintonationはくずさないで、練習させることができる。指導にあたっては、こうしたくふうをこらして正しいintonationも合わせて文型練習もなされることが望ましい。

## 2 文法事項について

### (調査問題)

次の1, 2, 3を意味のおおる英文とするには、それぞれの□の中になんどの単語を一つずつ入れたらよいですか。その単語を解答用紙のそれぞれの——のところに書きなさい。

1. This watch is better □ that one.
2. I want □ read this book.
3. How □ water is there in the grass?

解答らん	
1.	than
2.	to
3.	much

解答らんの中の語は正答である。

### (分析的問題)

次の各文を完成させるには( )の中になんどの単語を入れたらよいですか。その単語を解答用紙に書き入れなさい。

1. I am not so busy( )he.
2. Father wants( )drink tea.
3. How( )sugar do you want in your coffee?
4. I am very glad( )meet you.

5. He is taller( )you.  
 6. How( )brother do you have?  
 7. Please give me something( )eat.

解答らん			
1.	as	5.	than
2.	to	6.	many
3.	much	7.	to
4.	to		

解答らん中の語は正答である。

表 1 4 調査問題正答者数

番 号	1	2	3
正 答	18	62	46

表 1 5 分析的問題正答率

番 号	1	2	3	4	5	6	7
正 答	17	60	17	56	63	50	58

表 1 6 調査問題正答者数分布

正答数	0	1	2	3
人 数	27	27	36	10

表 1 7 分析的問題正答者数分布

正答数	0	1	2	3	4	5	6	7
人 数	16	11	11	16	12	15	15	4

① thanについて

調査問題の正答 47 であったが、分析的問題では 63 である。両方正答は 39、調査問題だけ正答 8、分析的問題だけ正答 24 となっている。then, thane, tham, them などと spelling が誤って誤答となったものが 10 である。

比較級の指導には -er を一つの手がかりとし、than をもう一つの手がかりとして指導することが必要である。

誤答例としては、先の spelling の誤り以外に、a(2) for(6), has, do, did, have, hav at, is, was, in, to, are, you, good, so, the, just など。そのほか das, boutles louts など全くでたらめと思われるものもある。

② not so ~ as について

上の比較級の問題に関連するのであるが、正答数は 17 であった。この型は 1 年あるいは 2 年の教科書にでてきているものであるが、drill の時間があまりとられていないのか、結果がよくない。例えば New Prince Readers のテキストでは、1 年のときにてているが、1 課の中に比較級、最上級 as-as, not so-as と非常に多く、しかも時間もあまりかけないですぎてしまうようになっている。これはもちろん as-as との関連において指導すべきである。生徒はとかく word centered mind になりがちで、そういう関連語句に注意しない例が多いが、構文の徹底をはからねばならない。誤答例としては is(13), that(8), to(7), for(7), than(6), by(3), did, then, so, the, help, work, from, us, drive, そのほか foo, alues などがあった。

③ to について

元来不定詞は現代英語の動名詞的な性格をおびた名詞であって、それに前置詞の to がついていたので、時代の流れとともに、不定詞は動詞的の性格を前面に出して現在のようになり、前置詞の意味をもっていた to も、不定詞の記号化して現在にいたっているのであって、現在では不定詞といえ、to+

動詞の原形をさすことになっているくらいである。この表現も中学1年のときから、名詞的用法を始めとして、諸用法が逐次教えられているのである。調査問題に出されたものは、名詞的用法で、wantのあとにくるもので、生徒にはよくふれるものである。正答は62。同じ使い方のものを分析的問題では正答60となっている。両方正答46。調査問題だけ正答16、分析的問題だけ正答14であった。

分析的問題では、さらに something のあとにくる形容詞的用法と、glad のあとにくる副詞的用法について調べたが正答は58、56であった。この分析的問題3つについて3つ正答39、2つ正答18、1つだけ正答18となった。

誤答例をあげると、of, for, a, in, is, has, me, the, who, not, are, said, time, fews, he, from, have, that, can, an, and, like, was, on, you, そのほか、spell のでたらめなもの svits, bsy, youts, sinc, lonst などである。

#### ④ How much と How many について

How much に関して予想した通り、結果は思わしくなく、正答数は調査問題では18、分析的問題では17であった。New Everyday English, Junior Crown, New Prince Readers では1年あるいは2年のときに、much がそれぞれ量を示す使い方としてでてきている。しかし How much の型は New Everyday English で、「いくら」と値段をきく例があるほかは、具体的に量をきく例としてはでていない。how と much の使い方はそれぞれでているのであるから、How much ~ とする応用力が望まれるわけであるが、テキストをはなれても、重要な事は教えなければならない。

誤答例をあげると、調査問題にも、分析的問題にも、それぞれ many が36、32表われている。そのほかには are, may, a, is, has, you, cup, the, any, take, well, my, meny, give letter, little, mane, to, on, some, like, which などがある。

一方 How many, How much の誤答の中に How many が32、36とあるように、正答も How much より多いと予想したが、正答50は少し低すぎた。誤答には meny, miny, manys, may, my any など spelling の問題と思われるものが10ある。他の誤答例をあげると、are, not, you was, has, did, long, than, your, to, wont, touts, dis, buetefil などである。

文法事項や、語法の指導では生徒の実態によっては、構造面では5文型にきめて、それをもとにして文法事項をつみ重ねていくとか、25文型にするとか、さらに細分して70とか80とかにするとか、ということがきまってくる。そして次に必要なことは function words あるいは structure words を確めて、その使い方をどの程度、教えこむか、その上にたつてこまかい文法事項が教えられてくるわけである。そのためには教材研究をしっかりとやって、指導案をたてて同じことを繰り返し、繰り返し指導していくことが大切である。1つのことを教えこむのに、7回位繰り返さないと、徹底しないものだというが、それ位の繰り返しは必要である。とくに中以下の生徒の場合は、こまかい分類をして、複雑なことを教えようとしてもむだなことであって、基本的な事項だけに限って、繰り返し、繰り返し、教えていくのがよいと思う。

## 4 書く力について

### (1) 書き換え問題

(調査問題)

次の1, 2, 3を〔 〕内のさしずにしたがって書きかえるには、それぞれ□の中にどんな単語を一つずつ入れたらよいですか。それらの単語を解答用紙のそれぞれ — のところに書きなさい。

1. The boys went to school.

〔「・・・しているところでした。」という過去の進行形の文に書きかえよ。〕

ア イ ウ 田 団 カ.

2. Tom opened this box.

〔「・・・は・・・された。」という過去の受け身の形の文に書きかえよ。〕

ア イ ウ 田 団 カ.

3. He is running fast.

〔「・・・はなんと・・・でしょう。」という感嘆文に書きかえよ。〕

ア イ ウ 田 団!

解 答 ら ん	
1.	The boys were going to school.
2.	This box was opened by Tom.
3.	How fast he is running!

(解答らんのの中の文は正答)

(分析的問題)

次の各文をそれぞれ( )内の指示にしたがって書きかえなさい。答えは解答用紙に書き入れなさい。( )内に解答をいれさせたもので、( )内のものは正答。

1. They swim in the river.

(現在進行形に)

2. He runs with his friends.

(過去進行形に)

3. This is a very pretty flower.

(感嘆文に)

4. He is very kind.

(感嘆文に)

5. She sings a song.

(現在の受身文に)

6. Tom's father wrote this book. (過去の受身文に)

解 答 ら ん	
1.	They (are) (swimming) in the pool.
2.	He (was) (running) with his friends.
3.	(What) (a) (pretty) (flower) (this) (is)!
4.	(How) (kind) (he) (is)!
5.	(A) (song) (is) (sung) (by) (her).
6.	(This)(book)(was)(written)(by)(Tom's)(father).

表18 調査問題正答者数

番号	1	2	3
正答	14	34	5

表20 調査問題正答者数分布

正答数	0	1	2	3
人数	60	28	9	3

## ① 進行形について

調査問題では The boys went to school を過去の進行形になおすもので、正答は14であった。going を使おうとしたものは正答を除いて32, wenting としたもの11。主な誤答例をあげると、The boys be going to school. The boys did going to school. The boy were going to school. The boy was wenting to school. The boys was going to school. The boys is going to school. The boys went going to school. The boys was wenting~. The boys were wenting ~. The boys is wenting~ などである。このうち The boys was going~ というのがかなりあったが、それらを含めて、ここにあげた誤答の場合は進行形は多少わかっているが、went を were going にするときの操作に誤りがあったものであろう。その他に、問題の意味をとりちがえての誤答となったもの、すなわち The boy was going to ~ が3, The boy is going to ~ が1, The boys are going to ~ が2あった。また were を wear と誤った spelling に問題のあるものもいた。これらはいずれも不注意、あるいは spelling の問題といえるもので、進行形そのものはある程度心得ているといつてよいであろう。こういう誤りをしたもの33である。その他の進行形を理解していないと思われるものの誤答例は The boys was went to school. The boy wanted was to school. Boys was go to the school. The boys was wented to school. The boys know went to school. The boys are gone to school. The boys was gone to school. The boys wentied to the school. The didn't boys went to school. などである。

分析的問題では、書き変える部分を指示した。理由はほかの部分の spelling の写し違いなどを防ぐと思ったからである。現在進行形の場合が62, 過去進行形の場合が66という正答であった。誤答を分析してみると、現在進行形の場合は、are swiming が12, are swimming が1と swimming の spelling に問題のあったもの13。is swimming 3, was swiming 1, is swimming 1, were swimming 1 と、tense あるいは concord 及び spelling の誤り7であった。計20は進行形はわかっていると思われた。

過去進行形の方をみると、was ranning 1, was runing 2, was raning 1 と running の spelling に問題のあるものが4, were running 1, is running 2 と tense または concord に誤り3であった。

このように進行形そのものでなくて、時制とか、主語と動詞の一致とか、spelling というか、動

表19 分析的問題正答者数

番号	1	2	3	4	5	6
正答	62	66	53	46	10	27
備考	両方正答53		39		9	

表21 分析的問題正答者数分布

正答数	0	1	2	3	4	5	6
人数	14	17	13	22	16	11	7

詞の活用をしっかりと覚えこんでいないための誤りがかなり多い。その他の誤りは、現在進行形 *ar swim, has swimming, will swimming, play swim, play swimming, swimming to, swim got, hav swimming* などであり、過去進行形では、*was runed, was runs raning to, das runs, was run, runs withe, did running, is runs, is runed, runs has, has runnings, had runsed* などである。

## ② 受身の形の文について

調査問題では、*Tom opened this box.* を *This box was opened by Tom.* に変えるものである。正答は 34 であった。能動態の文を受身の形に変えるのには、先ず始めの文の最後にある単語を主語にし、次に *be* 動詞をもってきて、本動詞の過去分詞の形を続けて、さらにそのあとに *by* ともとの文の主語をもってくるとできあがると、生徒の頭の中にはあると思われる。このような公式にぴったりあてはまる問題ができればよくできるが、少しちがって最後に前置詞句がきたりしていると、とんでもない解答がでてくる例がよくある。

*They eat rice in Japan.* をかえさせたとのであるが、*Japan is eaten rice with them.* とした。文の一番最後のものを文頭にしてつくり、*by them* は正しくないと思ったので、*with them* としたということがある。同じときに、*We saw her enter the room.* を受身の形にかえさせたら、*The room saw to enter her.* などがでてきたりする。また *He is well known to the world as a novelist.* を能動態にさせたらこの文には *by* ~ の形がないから、一般の場合と考えて、*They* を主語にして、*They know him to the world as a novelist well.* と解答した生徒があった。これらの生徒は能動態を受身の形に、またその逆にすることを理解しているといっているのかどうか。公式は知っているが、そのあてはめ方がまずかったということになるのであろうか。それにしてもこういう生徒は非常に多い。もちろんこういう人たちは理解しているとは云えないわけで、英語そのものがわからなくとも、機械的に公式にあてはめて、出来ればよいというものではなく、本当に英語の構造を理解させることが大切である。

調査問題では、上の正答以外は受身の形をととのえたものは 21、そのうち *tense* に誤り 4、*opened* としないで *open* としていたもの 5 で、あとは *be* 動詞と *open* の過去分詞の *opened* と形はととのっていたが、*Tom was opened by this box.* などとしたものが多かった。

分析的問題では、*she sings a song.* を *A song is sung by her.* としたものは 9、*Tom's father wrote this book.* を *This book was written by Tom's father.* としたものは 27 であった。誤答の中に指示に従わないもの、例えば A としないで *The* としたもの 3、*Song is sung* ~ としたものもいた。そのほかに形はととのっているが、動詞の活用に誤りのもの、すなわち、*sung* としないで、*sang, singen, singed, song, sing, swun sings* などとしたもの、28、また *written* としないで *wrote, writtn, wroted, wretten, writ, wroted* などとしたもの 31 となった。また *by her* あるいは *by Tom's father* としないで、*for her* または *for Tom's father* としたもの、*by she* としたものもあった。そのほかの誤答例では *She has been sings a song. The song was singing by her. She is song by a sing. Tom's father has been wrote this book. This book had wrote since Tom's father. This*

book is to wrotey Tom's father. など、全く理解していないと思われるものが、多かった。A song is sungより、This book was writtenに正答が多いというのは、後者の文例がより多く練習されているためと考えられる。単に機械的になれさせるのではなく、時制をかけて、くり返し、くり返しやらせ、transformationの原理などを応用して、一つ一つ根気よくのみこませることが大切である。

その他の誤答例は次のようなものである。She is singing a was song. She sings as lerag as snng. Sang is a sing by her. A sang is have she sings. The song was singing by her. They swim she sings a song. She is sing by a songs. A song has singed by her. The song has singed by her. The song has sings is she. A song has sings by her. A song been sings by she. A song has been her sings. A song is by she sing.また、Tom's father were been wrote this book. This book was been Tom's father wrote. This book was father wrote by Tom's. Tom is father wroted this is book. Wrote book Tome this batas uts los. Tom is father wrote was this book's. He runs toms father wrote this book. This book had wrote by his father. This book a father wrote the Tom. This book Tom's father was by wrote. This is father wrote this book tom's.

調査問題と分析的問題3つ全部正答はわずか5であった。

### ③ 感嘆文について

調査問題はHe is running fast.をHow fast he is running!に変えるもので正答は5。How fast running he is. What fast running he is. How running fast he is. What running fast he isが多かった。感嘆文はHowかWhatをもってくればよいという意識はかなりつよいようで、Howを文頭にもってきているもの45、Whatを文頭にもってきているもの39であった。その他の誤答例は、

What he running he is. What he is running fast. How run fast he is. He is how running fast. How fast is running he. The is a running fast. What fast run he is. What a run he is. What run fast he is. How a running fast is. What a fast he running How he running very fast. How fast he run is. What a fast running fast he. He will a run fast. What do you running fast He is very running fast

分析的問題ではThis is a very pretty flower.をWhat a pretty flower this is! および、He is very kindをHow kind he is!に変えるものであった。いずれも、調査問題に比べて、典型的な問題だったためか、正答は53と46で両方正答は39であった。

誤答をみると、This is a very pretty flower.の方で、whatを文頭にもってきたものは正答を除いて25、Howは15であった。He is very kind.では、Whatをもってきたもの20、Howをもってきたものは正答を除くと18であった。分析的問題だけをみると、一応生

徒の大部分は、Whatにしたらいいか、Howにしたらいいかは心得ているように思われる。

誤答は次のようなものである。 What a flower pretty is this. What a very pretty flower this is. What a pretty flower is this. What this is a very pretty. What is a very pretty flower. What are pretty flower this is. What a pretty this flower is. What this is a pretty flower. How pretty a this flower is. How pretty flower this is a. How a very pretty flower this. How is pretty flower this. How a pretty flower this is. Very pretty flower a this is. This flower is a very pretty. This is a very pretty flowers. This is a very flower pretty. The flower very pretty this is.

また How kind is he. Very kind he is. How very kind he is. He was very kindes. He is very kinding, How he is kind. How is he kind. What kind he is. Here is very kind. What he is kind. What is very kind. What kind is he. is he very kinds, What a very kind he is. What is very kind. What a he kind, What a kind he is. What very kind he.

こうして、書きかえをやらせてみると、公式をよく理解しないで、適当にその公式をあてはめたり、誤った公式をあてはめたりしているものが非常に多く、また、公式はわかっても spelling, 動詞の活用、主語と動詞の一致といったような面の誤りも、非常に多い。そういった構造の理解には IC 分析（直接構成要素分析）とか、また公式を身につけさせるためには、pattern practice とか、transformation を応用するとか、くふうをこらして、指導にあたるのが大切であろう。

(2) 書くことについて

(調査問題)

次の1, 2, 3の日本語の意味を表わす英文をつくるには, それぞれの  の中にどんな単語を一つずつ入れたらよいですか。それらの単語を解答用紙のそれぞれの \_\_\_\_\_ のところに書きなさい。

1. あなたはいつここに来ましたか。

ア  イ  ウ  エ  オ ?

2. わたしはかれに本を1さつあげました。

ア  イ  ウ  エ  オ .

3. わたしはトム(Tom)がそこに立っているのを見ました。

ア  イ  ウ  エ  オ .

解 答 ら ん	
1.	<u>When did you come here ?</u>
2.	<u>I gave him a book.</u>
3.	<u>I saw Tom standing there.</u>

(上文は正答)

(分析的問題)

次の日本語の意味を表わす英文をつくりなさい。答えは解答用紙に書き入れなさい。

1. 彼はいつ大阪へ行きましたか。

2. 彼女はわたしに本を一さつくれました。

3. わたしは彼がそこを走っているのをみました。

4. 彼はアメリカへ行ったことがあります。

5. これらの鉛筆のうち, 一本は赤い。

6. わたしは彼が歌を歌っているのをききました。

7. 彼は右手に本を一さつ持っています。

8. 彼は川で泳ぎます。

解 答 ら ん	
1.	<u>When did he come to Osaka ?</u>
2.	<u>She gave me a book.</u>
3.	<u>I saw him running there.</u>
4.	<u>He has been to America.</u>
5.	<u>One of these pencils is red.</u>
6.	<u>I heard him singing a song.</u>
7.	<u>He has a book in his right hand.</u>
8.	<u>He swims in the river.</u>

解答  
らん  
中の  
英文  
は正  
答

(分析的問題) 録音テープ・テスト

例 { He are an English teacher.  
He is an English teacher.  
He was an English teather.

1. { One of my students is going to America  
One of my students are going to America  
One of my students go to America

次の日本語を英文になおしたら, それぞれ三通りの文ができました。二回ずつくり返して読みますからよく聞いて, 何番目のものが正しいか, その番号を○で囲みなさい。

2. { He swim in the pool.  
 { He swims in the pool.  
 { He has swim in the pool.
3. { She has a flower in her right hand.  
 { She have a flower in her right hand.  
 { She had a flower in her right hand.
4. { I saw his crossing the road.  
 { I saw he crossing the road.  
 { I saw him crossing the road.
5. { I went to Tokyo.  
 { I have been to Tokyo.  
 { I had been to Tokyo.

例 彼は英語の先生です。

- わたしの生徒たちのうちの一人がアメリカへ行くところです。
- 彼はプールで泳ぐ。
- 彼女は右手に一本の花を持っています。
- わたしは彼が道を横切っていくのを見ました。
- わたしは東京へ行ったことがあります。

解答らん			
例	1	②	3
1	①	2	3
2	1	②	3
3	①	2	3
4	1	2	③
5	1	②	3

○印は正答

表 2 2 調査問題正答

番号	1	2	3
正答	22	26	4

表 2 3 分析的問題正答

番号	1	2	3	4	5	6	7	8
ペーパーテスト	2	37	75	1	11	3	9	16
録音テープテスト	27	39	41	45	39			

表 2 4 調査問題正答者数分布

正答数	0	1	2	3
人数	67	22	10	1

表 2 5 分析的問題正答者数分布

正答数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
ペーパーテスト	55	16	13	7	2	3	2	2	0
録音テープテスト	17	24	32	17	8	4			

① 「あなたはいつここにきましたか」について

調査問題の結果は正答は22であった。誤答には、When did you came here?, When did you come hier?, When did you go hear?, When did you go there? When did you come there?など、spellingの問題、あるいはcome hereをgo thereとしたものや、When do you come here?とかWhen do you came there? When do you go here?, When do you come here?などtenseの誤りがかなりあった。Whenをつかうと考えていたものが、正答を含めて47あったが、一般動詞の疑問文をつくるのに、do, does, didをつかうことを知らないで、be動詞をつかったものが9であるが語順の乱れや、動詞の活用の乱れが多かった。

分析的問題の「いつ彼は大阪へ行きましたか」は正答が27, 誤答ではWhen does he go to Osaka?, When did he went to Osaka?, When did he going to Osaka?, When does he went to Osaka?, When he went to Osaka?などがみられた。Whenをつかったものは正答を含めて57であった。その他の誤答は, How he is went to Osaka?, Does he went to when Osaka?, He has a go to Osaka?, Did he wheher to on Osaka?, Does he go to the Osaka?, What he has went in Osaka?, Where does he got in Osaka?, Why did he going to Osaka?, He has a got the Osaka?などである。

② 「わたくしは彼に本を一さつあげました」について

調査問題は正答26であった。

誤答をみると, I give him a book. I geve him a book, I given him a book. I gave he a book. I gave his a book. I given a book to him など, tenseや人称の誤り, spellingの誤りと思われるものはいくつかみられた。特に I give him a bookは4, 5名見られた。geve, givenのように, 活用のしっかり身についていないものも多い。そのほか, 語順の違いがかなり多かった。I gave a book him, I give a book him. I gived one book his. I gave a book he. I geve a book him. I given a book him, また, 動詞を除いて日本語の語順によって並べたと思われる I gave he book one, I gave him to bookのような誤りも見えた。

分析的問題の「彼女は私に一さつの本をくれた」については, 正答は35, 誤りは調査問題の場合と同じく, 時制, 語順に多く, She give me a book. She gave a book me. She give a book me. She gives me a book. She gived a book me, また gave の spelling や, 冠詞をおとしたものもある。She gave book to me. She giave me a book. She gived me a book. She goive me a book. She geve me a book. She given book to me.

調査問題と分析的問題との実施された時期が, 僅か2ヶ月ほど, ずれていたのだが, 分析的問題はかなり, 生徒の実力の向上のあとをみせている。誤答にしても, 調査問題のときには a book me あるいは, give の単語以外のでたらしめのものも多かったが, 分析的問題では, me a book の型をとっているものがずっとふえている。また give 以外の単語というものは get, is, he, was と少なくなっている。give のような, ひんばんに表われる単語は, 文型というよりも, 一つ一つ語法を確実に身につけさせることが必要である。

③ 「わたしはトムがそこに立っているのを見ました」について

調査問題は正答は4であった。誤答をみると I sow Tom standing that, I saw Tom stand there. I saw Tom standed there, と一応の型をとっているのが2, 3で他は全然, 形をなしていないものばかりで, この文型がいかにわかりにくいかを改めて知らされた参考のため他の誤答の例を少しあげておく。I met Tom is setting. I see stand it Tom, I will seen Tom that. I saw there stand up Tom, I see stern drap Tom, I look to stande him, I have the Tom see. I went seen this he. I was seen sitting Tom. I saw Tom the stand,

I saw Tom was stand. I saw Tom this stand. I see get up Tom. I seen stunding Tom it. I see standing Tom there. I saw Tom there standing. I saw Tom there stand.

分析的問題では、「私は彼がそこを走っているのを見ました」と「私は彼が歌を歌っているのをききました」の二つであるが、正答はそれぞれ7と3であった。誤答をみると、I saw him runing there 1. I saw him running it 2. I saw he running there. 6. I saw he runing there 1. I see he running thcr 1. I see he running t-his. 1. I see he running that. 1. I see he running hear 1. I saw him run there. 4. I saw she run here. 1 など一応文型をととのえているものがふえている。その他 I saw him there running. 2. I saw him that running. 1 もあった。その他の誤答は次のようなものである。I know this run he. I have see running he. I was run meet he. I saw him there runs. I saw running there he. I saw run to he. I see is running him. I saw that his running. I looked it him run. I see his there run. I saw he has run. I saw he the running. I weet him there running. I sew there runs him. I was this run. I saw him the runs. I saw the his running. I saw him this lanning. I saw lunning that his. I see runing is he. I see roning he there. I look the running him.

「私は彼が歌を歌っているのをききました」の正答は3であった。誤答は、I heard he singing a song. 3. I hear he singing a song. 1. I heard him sing a song 1. I heard him singging a song. 1. I heard she sing a song. 1. I heard him sings a song. 2. I heard she sings a song. 1. I heard he sing a song. 4. I heard him to singing song. 1. I listened her singing a song. 1. I hiard him singing a song. 1. など一応文型をととのえているものがかなりいたことは上の場合と同じであるが、seeとかhearの活用をしっかりとつかんでいないものが目立った。

調査問題にもみられたが、分析的問題ではかなり出てきたものとして、I saw that he was running there. および、I heard that he was singing a song. である。それと I saw him run there と I heard him sing a song. である。いずれも文として正しいことにはちがいが無いが、意味がちがってくることをしっかりとつかませる必要がある。I saw that he was ~ は、例えば、I saw that he was hurrying, so I didn't ask him any questions. のように cause, reason とか effect を表わすのにつかうのである。また I heard that she was singing a song. は、「誰かが、彼女が歌っていたと云ったのをきいた」の意味となる。それから I saw him run there. は動作の完了を示すわけである。それに対し、I saw him running there. は動作の進行中を見たということで、I saw him when he was running there. の意味であるから、この意味の相違をしっかりと、理解させる必要がある。

録音テープ・テストの問題、「わたしは彼が道を横切っていくのを見ました」の結果をみてみると、

正答は45, he crossingとしたもの36, his crossingとしたもの18であった。この問題は、確率1/3とは云え、45人のものは、書かせた場合はともかく、正しいものを選ぶときには、誤らないと見てよいと思う。もちろん中には、書かせたとき he running としていながら、録音テープ・テストでは him crossing を選んだものが3, 4人いる。しかし正答の大部分は、書かせたときには、him running あるいは、him run としているもので、nexusの関係を心得ているとみてよい。

なお、him running, him crossing, him singingの関係がいずれも nexusの関係にあることをはっきり理解させることが大切である。それには he is running が him running にかわったとする transformationの原理が役に立つであろう。しかしこれには I saw him running と I saw that he was running とを同一視させる危険性があるので十分注意を要することはいうまでもない。I saw him when he was running から、I saw him running. を導くのがよいと思う。

#### ④ 「彼はアメリカへ行ったことがあります」について

正答は14であった。一応 He has been to America. を正答としたが、in America も正答に加えるなら正答は18となる。なおアメリカ英語では has gone もつかわれてはいるが、ここでは正答からはずした。has gone としたものは1である。誤答のうち has been gone ~, has been to go ~, has went to ~, have went to ~, He has been an America. などは、現在完了形を使わねばならないとわかっていたものと思っただろうか。他に went to ~, was going to ~, had been in ~, went to in ~, had ever to ~, have go to ~, did going to ~, is never went ~, has ever go ~, has once in ~, go to the ~, ever gone in ~, has once go ~, was go on ~, is went to ~, などが主な誤答である。なおアメリカを Amerika, Amelica としたものもいた。

録音テープ・テストの「わたしは東京へ行ったことがあります」では、正答は39であった。went to としたものの15, had been to ~ としたものの45であった。had been to ~ をよいとしたものが45あった。選択肢に has gone も加えればもっと変わってきたと思われる。

なお、ペーパー・テストで正答14のうち、半数の7は録音テープ・テストに正答を、他の半数は録音テープ・テストでは had been to を選んでいるが、日本語の「行ったこと」にこだわったものであろうか。

has been to, has gone to ~ の区別はむずかしいところであるが、それにしても I have gone to ~ と云ういい方も、アメリカでは正しいとされてきており、生徒あてにきている、pen palsの手紙にも、よくみられるが、この二つの区別を固執する必要もないと思われる。

#### ⑤ 「これらの鉛筆のうち一本は赤い」について

分析的問題の1つであるが、正答は1であった。one of ~ の形ができるかどうかと思ったのだが、やはり無理だったのであろうか。なお、正答もいれて、one of ~ の形をとったものはわずか7であった。One of the red three pencils. One of those one is red. One of these pencil is red. Those pencils are one of red. These are pencils one of red. This pencil one of red pencil である。

他の誤答は, These pencils that is a red. A read pincle in there it. There a pencils and on red. These pencils are peace of read. While these are pencils one red. One is red in these pencils などである。

録音テープ・テストをみると「わたしの生徒たちのうちの一人がアメリカへ行くところです」では、正答27, are goingとしたもの41, go toとしたもの31であった。なおペーパー・テストで正解を与えた生徒は録音テープ・テストではare goingと誤答を与えている。ペーパーでOne of these pencil is redとした生徒も、録音テープ・テストではare goingを選んでいいる。これなどは、英語学習にあつて、目から入るのと、耳から入るのとの間の関係が比較的うすい一例と云つてよいであろう。この問題は今後の宿題とならう。

⑥ 「彼は右手に本を一さつもっています」について

正答は9であった。正答を除いて、He has a bookの部分の出来たもの27であった。in his right handの所で、rightが出来ずに正答が出せなかったものは14。riht, rait, light, lait, leghtなどが、表われたが、ここでもlとrの区別がはっきりと理解されていないことが明らかである。それからin him handという解答もあった。その他ではHe is a boook in his megil(「右のつもりか?」) hand, he is hand. He is right hard in a one book. He has light hand to the one book. He have right hand of that a book, He is have one book, He have book right in his hand. He have a book in the life finger. He takes a book to his right hand. He has a book to him late hand. He has been a book in right hand. He has brought a book in his right handなどで1つHe have a book in his right hand. という誤りがあった。

この問題がこれくらいの出来ということになると、他の問題の結果がよくないのは当然という感じがしないでもない。同一のpatternをのみこませるのに100回くらい繰り返して、効果をあげているということをきいたことがあるが、それくらい繰り返さなければならぬのかもしれない。

録音テープ・テストの結果では、「彼女は右手に一本の花をもっています」であるが、正答は41であった。haveとしたもの24, hadが33であった。もちろんこの場合はhasのところだけを問題にしたからであるが、実際にわかっているかどうかは、また別のこととなる。

⑦ 「彼は川で泳ぎます」について

正答は16, 誤答ではHe swim in the river, が26, He swim at the river 1, He swims in the liver 1. He swam in the river 1, He swimming in the river 6, He is swimming in the river 1, He is swim in the river. He is swimming the river. He will siwm in the rever, He is swimming a ribar 1, などが、文型は心得ているのではないかと思われた。riverのspellingについては、正しいもの62, rever, liber, ribar, raverなどの誤りがあった。

録音テープ・テストの同じ問題では、やはりswimのところを問題にしたのであるが、正答は39, swimとしたもの40, has swimを正しいとしたもの20であった。

録音テープ・テストをみたところでも、三人称単数現在の-sやhasはもっと徹底が要求される。

英作文は我々が覚えている英文を借用して、その一部を入れかえたりして、英語になおしているのである。だから、英作文にあっては、基本的な文型を含んだ英文を出来るだけ沢山覚えておいて、それを利用するということになる。それには先ず易しい英文を沢山読んで、英語になじみ、英語構文になれ、英語的な考え方になれ、英語を理解しなければならない。それと同時に、日本語をよく読みとって、内容をつかんで、日本語の字句にとらわれずに、意味を英語的考え方に従って並べなおして、英語にかえていくことになる。ところが生徒は、とかく日本語をみれば、そのまま逐語訳をしようとする。これは英文和訳でも同じことである。

それで、英作文にあっては、色々の基本的な文型を pattern practice や、あるいはそれを利用した oral composition などを通して徹底的に覚えこませることが大切である。文法的な説明よりも、文を暗記させることが必要である。そしてたえず、この日本語を英語でいうとどうなるだろうと生徒に関心をもたせ、授業中、英文にふれているときに、その解決を与えてやるという動機づけが必要であろう。

## 5 読解力について

(調査問題)

次の  の中に述べられていることと合う文を、下の 1, 2, 3 のア, イ, ウ, エ, オ, の中から一つずつ選んで、解答用紙のその記号を○で囲みなさい。

Mr. White had a little dog. His name was John. John was very pretty, and everyone liked him.

Every morning Mr. White took him to the park near his house. John was very happy to play there with Mr. White.

One day Mr. Green, one of Mr. White's friends, came and saw the dog. "What a pretty dog you have!" he said. "Will you give me the dog?" "No, I can't," said Mr. White.

Mr. Green came very often and asked Mr. White to give him the dog. At last Mr. White said, "Yes" Mr. Green was very glad.

On a cold winter day Mr. Green came to take John. He put John in a box and drove for twenty miles with the box in his car. When he drove back to his house, he put the box at the door.

The next morning Mr. White heard some sounds at the door. He opened the door and there stood John.

(注) mile 「マイル」 sound 「音」

- ア John was given to Mr. Green, because Mr. White did not like John.
- ① John was given to Mr. Green, because Mr. Green wanted John very much.
- 1 ウ John was given to Mr. Green, because John did not like Mr. White.
- エ John was given to Mr. Green, because John liked Mr. White very much.
- オ John was given to Mr. Green, because Mr. White wanted John very much.

- ア Mr. Green drove back to his house after he played with the dog in the park.
- イ Mr. Green drove back to his house after he put the box at the door.
- 2 ウ Mr. Green drove back to his house after he gave his dog to his friend.
- エ Mr. Green drove back to his house after he took the dog to the park.
- ② Mr. Green drove back to his house after he got the dog from his friend.

- ア John came back to his old house in an hour.
- ① John came back to his old house the next morning.
- 3 ウ John came back to his old house the next evening.
- エ John came back to his old house the next night.
- オ John came back to his old house two days after.

○印正答

(分析的問題)

次の  中の文と同じ内容を述べているものを、下の五つの文の中から選んで、解答らん  
にその記号を書き入れなさい。

Swift was a great writer. He was traveling with his servant Tom. One day he was going out in the rain. He called for his boots. Tom brought the boots at once, but they were not cleaned. He said to his servant, "My boots are not

cleaned. Why did you not clean them?"

The servant answered, "As you are going out and the roads are so bad, I thought that your boots would be dirty again."

Swift wanted to start. The servant said, "I have not finished my breakfast yet."

With a smile on his face, Swift said, "Well, it is no use. You will soon get hungry again."

(注) boot(s) 「半長ぐつ」  
call for 「要求する」

ア Swift and Tom were traveling together.

イ When Swift called for his boots, his servant brought them to him at once.

ウ The boots that Tom brought to Swift were dirty.

エ Tom did not clean the boots because he was hungry.

オ When Swift was going out, Tom had already finished his breakfast.

解答らん

ア	イ	ウ
---	---	---

(解答らん中の文字は正答)

(分析的問題) 録音テープ・テスト

Hanako's friend Masako is not feeling so well. She caught a cold. The cold seems to be growing worse, so she wants to see a doctor today. She has not decided what doctor to see. Perhaps she will see Dr. Sato. He will perhaps tell her to stay in bed for a few days. Perhaps he will give her a shot, too.

次に少し長い文を二回読みます。その内容とあうものを下の八つの文の中から三つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

1. Hanako is ill.
- ② Hanako's friend Masako is ill.
3. She is getting better.
- ④ She wants to see a doctor.
5. She has decided what doctor to see.
6. Dr. Sato will tell her that she way go out.
7. She has stayed in bed for a few days.
- ⑧ Dr. Sato will give her a shot.

(注) a shot 「注射」

○印正答

表 2 6 調査問題応答分布

問題 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
1	5	40	9	34	9
2	11	46	20	12	7
3	8	62	11	11	6

○印正答

表 2 7 分析的問題応答分布その 1

選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
人 数	51	72	61	55	11

○印正答

表 2 8 分析的問題応答分布その 2

選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8
人 数	7	64	6	33	64	16	58	47

○印正答

① 調査問題について

1番はMr. Green came very often and asked Mr. White to give him the dog. At last Mr. White said, "Yes," Mr. Green was very glad. のところの意味内容で「イ」の~, because Mr. Green wanted John very much. を選ぶもので、40の正答者であった。「エ」の~, because John liked Mr. White very much. が34もあったが、いずれも、John was given to Mr. Green, ~のところを無視して、John was very pretty, and everyone liked him. の文だけをみて似ているからと選んだものと思われる。

2番については、On a cold winter day Mr. Green came to take John. He put John in a box and drove for twenty miles with the box in his car. When he drove back to his house, he put the box at the door. から「オ」が正答であるが7であった。戸口の所にその箱をおいてから、家へ入ったとでも考えたものか、「イ」の応答が46もあったが、明らかに drove という単語を見おとしたものと思われる。また「ウ」と応答したものの20であるが、この生徒たちは恐らく、全文を読まないで、あるいは読んだにしてもMr. WhiteとMr. Green との間で、どちらが犬をくれて、どちらが犬をもらったのかの区別がつかなかったものと思われる。

3番は、The next morning Mr. White heard some sounds at the door. He opened the door and there stood John. から、正答は「イ」で、the next morning とははっきりしてただけに、62の正答者があった。next eveningやnext nightに回答がそれぞれ11ずつあったが、nextだけをみて応答したものであろうか。

② 分析的問題 (ペーパー・テスト) について

He was traveling with his servant Tom. の文から、「ア」の正しいことはすぐわかると考えられたが、正答者は51である。文型が違っていたためかもしれない。Tom brought the boots at onceの文から、「イ」の正しいこともすぐわかるのであって、正答は72であった。またthey were not cleanedから、「ウ」も正しいことがわかるのであるが、単語がdirtyという語を問題の方につかっていたためか、正答は61と前問よりも低くなった。「エ」については、「空腹だったから、くつをみがかなかった」ということは本文にないし、また「オ」については「Tomがすでに朝食を終えていた」ということもないので、「エ」、「オ」とも誤答となるが、それ

それ55, 61の応答があった。「エ」と「オ」の応答をしたものは、内容が理解できずに、たゞ同じような単語をさがして行って、いゝかげんに○をつけたのではないかと思われる。

③ 分析的問題 (録音テープテスト) について

調査問題の放送問題にも関係するもので、hearing でどれくらい内容がつかめたかが問題となる。Hanako's friend Masako is not feeling well. から2番, She wants to see a doctorから4番, he will give her a shotから8番がそれぞれ正答となり、64, 33, 47の正答となった。4番があまりよくなかったのは、5番に応答があつまったためであろう。5番の応答が多かったのは、She has decided what doctor to seeとShe has not decided what doctor to seeのnotの有無に気がつかず、同一の文ときちがえたためと云えよう。同じことが、7番についてもいえる。すなわち、stay in bed for a few daysのところを同一というだけで応答したものと思われる。8番の場合はheとDr. Satoの同一人であることがわからなかったためと見える。それにしてもhearingは非常に大切であるから、テープ・レコーダー等を利用して十分になれさせて欲しいもの。

④ 調査問題 (放送問題) について

放送問題

- I 例 ア Sunday is the first day of the week.  
 イ Sunday is the second day of the week.  
 ウ Sunday is the third day of the week.  
 エ Sunday is the fourth day of the week.

1. ア Monday comes after Tuesday.  
 イ Monday comes after Wednesday.  
 ウ Monday comes after Saturday.  
 エ Monday comes after Sunday.

解答らん	
例	ア
1	エ
2	イ
3	ウ

2. ア April is the third month of the year.  
 イ March is the third month of the year.  
 ウ July is the third month of the year.  
 エ May is the third month of the year.

解答らん中の文字は  
正答

3. ア Eight and six are eleven.  
 イ Eight and six are twelve.  
 ウ Eight and six are fourteen.  
 エ Eight and six are sixteen.

II 1. What is the first month of the year?

- ア. It is July. イ. It is June. ウ. It is January. エ. It is August.

2. How many days are there in a week?

ア. There are ten. イ. There are seven.

ウ. There are nine. エ. There are eight.

3. When does Christmas come?

ア. It comes in September. イ. It comes in October.

ウ. It comes in November. エ. It comes in December.

解答らん	
1	ウ
2	イ
3	エ

解答らんの中の文字は正答

表 2 9 放送問題応答分布

		ア	イ	ウ	エ
I	1	17	13	11	(57)
	2	5	(49)	23	23
	3	13	12	(59)	16
II	1	17	26	(45)	12
	2	11	(62)	16	10
	3	12	6	22	(58)

○印正答

Iの1で「ア」と答えた17のものは「月曜のあとに火曜がくる」と日本語と同じ語順に考えたものであろう。

Iの2の正答数が少いのは月の名前がはっきり覚えられていないことを示すものと思われる。IIの1の出来がよくないのもその証拠と云えようか。

長文読解は生徒が苦手とするものである。これは平素教室で英問英答でもやっていれば好影響を与えるであろうが、そうでないと、生徒はとかく、word-centeredとなりがちである。だから、英文を訳させると和訳はするが、つじつまのあわない日本語になっけていても平気である。

例えば、We should be as careful of the books we read, as of the company we keep. という文で、companyを「会社」として平気である。また、Be as little in the house and be as much out of doors as you possibly can. ではlittleとhouseを結びつけて、「小さい家」としている生徒が意外に多いのである。それだから、He is as brave a man as ever breathed. が「勇敢な男は息をしなかった」などと珍訳がでてくる。結局構文そのものがわかっていないことと、文脈に合わせて辞書的意味を選択していくことができない。したがって、さらによく文脈を考えなければならないようなものは当然わからない。例えば、読書が大切だと説いて、そのあとにThe dead very often have more than the livingとつゞくのであるが、the deadやthe livingの意味が前者は「本で代表される死者」をさし、後者は、「自分の周囲の生きている人間」をさすなど、わかりっこないわけである。

#### IV ま と め

発音の面では、日本語と英語の音韻体系を比べることによってtrouble spotsを浮きぼりにし、

それを中心に、現場にのぞんでの生徒の trouble spots をつけ加えて、訓練していくことが必要となる。その場合個々の phoneme だけでなく、phoneme と phoneme との結合の要領をも訓練していかねばならない。例えば、同じ [œ] 音でも、have と hat では、前後の環境で、違ってくる。obey と note の o が、同じ [ou] であるとしたら、誤りということになる。obey の o は [ou] となることがむしろ少ないからである。それから、[t] と [u] ができても [tu] ができなかったり、at that time の t-th, t-t の結合の要領なども教えていく必要がある。それから accent, sentence stress による意味の構成あるいは変化などに対する感覚をも養わねばならない。また juncture や intonation が英語の理解の助けになり、その相異が意味の相異をきたす重要な要素となるということを生徒に理解させることが大切である。He speaks English naturally. をそのまま読めば、「自然に英語を話す」となり、もし naturally の前に juncture をおけば、「彼は当然英語を話す」となるという具合である。そして発音に関しては、contrast of minimal pairs の原則をいかして教材をつくり、指導していくのが、効果的である。そのためにはテーブやテレビ、ラジオを有効に使うことが必要で、それらを通して、native speaker の発音になれさせ、それに近い発音ができるように生徒を訓練させねばならない。

文の構造に關していえば、先ず教えるべき基本文型を定め、それをもとにして、その各要素を拡大していく方法をとるのがよいと思う。そしてその拡大をどこまでやるか、またどこまでは徹底させるということをきめていくことが必要である。それについては、昭和35年度の県中学校教育課程研究協議会資料や、県英語教育研究協議会「基本単語；000語とその活用」などが一つの基準となる。

そしてその基本文型を中心に、IC分析を利用して、生徒の recognition を助け、pattern-practice や transformation を通して文構造の定着をはかることが大切である。それには、先ず限定詞、助動詞、強意詞、前置詞、接続詞、関係詞、連結詞、疑問詞などの機能語の働きを徹底させることが必要である。これらが文構造の理解の signal の働きをするからである。例えば The wiggles nogglyly tiggled in to the moggle. という文をみてみよう。意味はわからぬながら、英語らしさを感じる。それは The, -s, -ly, -ed, into, the が、それぞれ、signal として働き、語順とともに英語らしい感じがするのである。こういう signal の働きをなす語がなかったら文構造は全然わからなくなる。He boxed me on the ear. とあれば、語順と-edから box が「箱」でなくて、「なぐる」の意味をもつ動詞だとわかるのである。

したがって、文意をとらえるときには、まず構造的意味をつかまえて、それから辞書の意味をさぐっていくようにさせねばならない。さもないと上例の box を「箱」として、全然意味が不明になってしまうことになる。生徒はとかく、構造的意味にかわりなく、辞書の意味だけで、事をすまそうとしがちであるから十分に気をつけねばならない。そのためには辞書の引き方指導もやり、あわせて各々の語の語法を、一つ一つ pattern practice を通して、徹底させることが必要であろう。

それから、生徒にとって修飾構造がむずかしいのであるが、expansion あるいは transformation を通して理解、徹底をはかることが望ましい。例えば The building is our school. You see the building over there. から The building you see over there is our school. という文ができてきたと説明すれば、there is the building と誤ることはさけられよう。

また、"Be as little in the house and be as much out of doors

as you possibly can. Take things as easily as you may, and depend upon it, the blessing of sleep will one day return." という文にあって、始めの部分で、as~as you possibly canの修飾構造がわかっておれば、「小さい家」などという誤りはおきこないのである。なお、ついでに、長文理解に関連するが、文と文の関係も大切であって、例えば上の文で、文と文との関係がわかって始めて、you という人が不眠症にかかっているらしいことがわかるのである。また It is true that not a few men kill themselves by overwork も「過労で自殺する」とはならないのである。「過労で命をちぎめる」となるものを、kill oneselfは「自殺する」と辞書の意味にこだわって、一歩退いて考えようとしなから、こういう誤りをするものである。先日も、教室で carbon dioxide は  $\text{CO}_2$  のことであると説明していたら、できる生徒が、「COと解してもいいでしょう。辞書にそうあります。」という。この場合は辞書が誤っていることがわかったのであるけれども、常識的に考えても、COと  $\text{CO}_2$  が同じということはあるに、気がつかないのである。そしてかくも辞書は生徒に大きな影響力を与えているのだと驚いたのであった。なおCOはもちろん carbon monoxide である。もちろん中には、The tail wags the dog. のように、常識を働かすと、かえって誤る場合もあるが、それはほとんど例外的な場合と考えてよいのであって、やはり、文の前後から、常識的に文を判断し、理解する力をも養成させることが大切である。

そしてこれにともなって、hearingの練習もたえず、行ない、英問英答も加えて、直聴直解へともっていくことが英語教育の目的であり、これができれば、自然、writingもよくなっていくのである。

文構造がしっかり理解できた上に、辞書の意味を加え、さらに、文法事項を除々に徹底させていくことが必要である。

少なくとも、語順と文構造の基礎的なものと、機能語の働きくらいは徹底させて欲しいものである。この上にはじめて、時制とか、仮定法とか、verbalとか、話法とかという複雑な文法事項がうちたてられたのである。

それから how to teach については、oral methodとか、oral approachとか、また minimal pairs の利用とか、pattern practice, transformation, I C 分析とか、種々いわれているが、いずれも、それぞれよい所をもっているものであって、教師が、よく研究して、その時その時にふさわしい学習指導の方法で、効果をあげていくことが大切である。どの一つをとってあげても、それ一つで万能というのではないのである。

この調査研究についてご協力いただいた新潟大学教育学部講師 Mrs. Deffner および中学校の校長先生はじめ諸先生ならびに生徒諸君に心からお礼を申しあげたい。なお、この稿の執筆は新潟県立東工業高校教諭 渡辺昌夫である。